HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	子どもたちの戦争 ： 文学作品に描かれる戦後南サハリンの共住生活
Author(s)	大谷, 梨乃
Citation	研究論集, 24, 97（左）-114（左）
Issue Date	2025-01-24
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgshhs.24.l97
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94028
Type	departmental bulletin paper
File Information	07_rjgshhs_24_p097-114_l.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

10.14943/rjgshhs.24.I 97

子どもたちの戦争：
文学作品に描かれる戦後南サハリンの共住生活

大　谷　梨　乃

要　旨

1945 年の樺太戦後，サハリン島の南半分が日本領樺太からソ連領サハリン州へと移行し，旧樺太住民の公式引揚が完了するまでの期間において，戦争では敵国どうしであったともいえる日本人住民とロシア人移住者が，同じ家で，同じ地域社会でともに暮らすという特異な時期があった。戦後南サハリンにおける移行期と共住生活は，とりわけその経験者に強烈な印象を残したと考えられ，手記やインタビュー記事などはもちろん，日本とロシアの双方において，作者自身が経験した共住生活をもとに創作された小説も発表されている。本稿では，移行期と共住生活を題材にした 2 つの小説，ゲンナジー・マシュキン『青い海，白い船』（1965）と渡辺毅「ぼくたちの〈日露〉戦争」（1996）を分析し，戦後の南サハリンやそこでの共住生活が，主に子どもたちの視点からどのように描かれているかを論じる。子どもたちは当初，相手の子どもたちに対して敵意や不信感を抱いているが，共住生活のなかで互いに直にかかわることで感情を変化させ，さらに関係性を築いていく。ときには「疑似戦争」もしながら，子どもたちは子どもたちなりに共住生活やその相手と折り合いをつけ，異なる国や文化の人々と交流しており，2 作品からはその様子を読み取ることができるだろう。一方で，作品からもわかるように，共住自体が一筋縄ではいかないのだが，その共住を描くということも，困難さや複雑さをはらんでいる。ソ連対日本という二項対立にもとづくステレオタイプは，表現する側はもとより，作品を享受する側にも影響していると考えられる。また，ソ連の移住者と日本人の旧樺太住民だけでなく，樺太に住んでいた，または大陸から移住してきた，朝鮮人や先住民たちの存在も無視してはならない。戦後 80 年が経った現在，世界各地で戦争や紛争が絶えない一方で，インターネットや SNS などを通じて世界中の人々が結びつき，広義では「共住」状態にあるといえる。そのような時代だからこそ，戦後南サハリンにおける移行期と共住生活について，あらためて考える意義があるだろう。

はじめに

サハリンは近代，目まぐるしい国境変動に見舞われた島である。雑居の島とされていたサハリンは，1875 年の樺太・千島交換条約でロシア領となったが，1905 年の日露戦争とポーツマス条約を経て，その南半分が日本領となった。しかし，日本領樺太の時代も長くは続かず，1945 年の日ソ戦におけるソ連侵攻を経て，再び全島がソ連領とされていったのである。1945 年 8 月，樺太戦の戦禍を逃れるため，樺太の住民たちを対象に緊急引揚が行われたが，すべての住民が引き揚げられたわけではなかった。公式引揚の完了が 1949 年であるため，それまでソ連占領下での生活を経験した旧樺太住民もいた。したがって，基本的には数年間という短い期間ではあるが，それまで樺太で生活を営んできた日本人らと，南サハリンにやってきたソ連の人々，加えて日本領樺太に住んでいた朝鮮人や先住民は，隣人もしくは同居人として文字通り「一つ屋根の下に」暮らしていたのである。すなわち，1940 年代後半の南サハリンでは，樺太戦において敵国どうしであった人々が，戦後すぐに隣人・同居人となるといった特異な現象が起こっていたのである。

戦後のサハリンについて，公文書による研究が本格的に可能になったのは，1992 年からである[1]。しかしながら公文書の公開よりも前に，そして公文書による研究がすすんだ現代においても，戦後の南サハリンにおける移行期と共住生活は，主にそれを経験した人々の手記やインタビューなどにおいて語られてきた。時期は短くとも，突然訪れた共住生活は，彼らに鮮烈な印象を残して記憶されたと考えられる。さらに，この移行期と共住生活の体験をもとに制作されたフィクション作品も存在する。興味深いことに，この特異な時期を描いた小説が，日本とロシア（当時ソ連）の双方において発表されているのである。本稿で取り上げる 2 つの小説は，どちらも子どもの視点から移行期や共住生活を描いたもので，異なる人々が共住することの困難やその克服について描かれている。本稿では，日本とロシア（ソ連）で発表された 2 つの小説を比較しつつ，敵であったはずの人々が共住生活を送った戦後の南サハリンの様子を，文学作品がどのように記録し，どのように表現しているのかを探ることで，この特異な現象を捉え直し，改めて「共住」について考えてみたい。

移行期と共住生活

まず，戦後の南サハリンにおける，日本領樺太からソ連領サハリン州への移行期，その過程で営まれた日本人とロシア人らの共住生活について概説する。先述のとおり，国立サハリン州

[1] エレーナ・サヴェーリエヴァ（小山内道子訳）『日本領樺太からソ連領サハリン州へ 一九四五年―一九四七年』成文社，2015 年，7 頁。

歴史文書館に所蔵されていた，サハリンの終戦に関する「極秘文書」が 1992 年に公開されて利用できるようになり，そのことが現在にいたるまで戦後のサハリンについての研究を発展させることとなった。エレーナ・サヴェーリエヴァはその史料を用い，戦後の南サハリンやクリール諸島（千島列島）における体制の移行や，日本の人々とソ連の人々との共住生活について，詳細な研究を行った。サヴェーリエヴァは，この移行期について，以下のように述べている。

> 南サハリンとクリール諸島における民政局による統治は一九四五年九月から一九四七年四月までの一年半だったが，この期間に面積においては決して大きくないこの領土で世界史的に非常に重要な多くの出来事が起こったといえる。そのなかには，その後何十年も解決されずに存在する領土問題を生じせしめたことや，短期間のうちにたいへんな長距離を越えて移住し，それぞれの生活を完全に変えることとなった何十万もの一般庶民の人間としての運命に関わる問題等が含まれていたのである[2]。

また，彼女の著書を訳した小山内道子も，「戦後サハリンで二年から四年にわたってロシア人との共生を経験したことは，旧樺太住民に良きにつけ，悪しきにつけその後の具体的なロシア人観を植え付けた」[3] とした。さらに，樺太の歴史と記憶についての論考においてグリシャチェフは，「1945 年から 1949 年は，ロシア人と日本人がたくさん協働し，相互に観察し合った，両国の歴史において驚くべき時期であった」[4] とする。では，この「驚くべき時期」はどのようにして形成されたのか。

1945 年 8 月 9 日，ソ連は国境を越えて日本領に進軍し，15 日の玉音放送をまたいで侵攻を続けた。樺太でも女性や子どもを中心に緊急引揚が行われたが，23 日に住民の島外移動が禁じられ，すべての人が引き揚げられたわけではなかった。その後 1 か月程度，南サハリンは略奪などが頻発する無秩序な空間であったが，ソ連邦人民委員会議副議長ミコヤンらが来訪し，状況の改善と今後の統治方法の決定に尽力した。ソ連は日本の行政機関を残したまま，すなわち旧樺太庁やそのトップである大津敏男を利用しつつ統治を始めた。同時に極東方面軍事会議附属の南サハリン州民政局が組織され，住民の生活に必要な条例を制定し，大津の名をも利用しながら戦後復興を行い，状況の改善に努めた。年末には大津を逮捕し，1946 年 1 月 1 日に樺太庁を廃止，２月２日には南サハリン州を設置し，大陸からの移住者を本格的に受け入れるようになった。1947 年にサハリンの南北の組織が統合され，ソ連領サハリン州が正式に誕生した。な

---

2 サヴェーリエヴァ『日本領樺太からソ連領サハリン州へ』８頁。

3 サヴェーリエヴァ『日本領樺太からソ連領サハリン州へ』180 頁（「訳者あとがき」）。

4 *Гришачев С.В.* Японское губернаторство Карафуто (1905-1945): история и социальная память // Ежегодник Япония. 2019. Т. 48. С. 280.

お，1946 年から 1949 年までに，計 4 回の公式引揚が行われた。そのため，本稿における移行期とは，統治機能上は 1947 年，共住生活が営まれた時期という意味では 1949 年までと想定している。すなわちおおよそ戦後数年間であり，作品もその時期の南サハリンを描いたものとしてよいだろう。ただし，公式引揚後もサハリンにとどまった，もしくはとどまらざるをえなかった旧樺太住民がいたということにも留意すべきである。

サヴェーリエヴァによれば，南サハリンの企業は労働者すなわち移住してくる人々を受け入れる計画も準備もできておらず，「多くの場合，移住者は日本人家族と一緒に住むことになった」[5]。また，富田武によれば，「占領後間もなくソ連の軍人や官吏が日本人宅に間借りするようになったが，力関係から広さも利便性も彼らに譲らざるをえなかった。当初は言葉が通じないためもあってトラブルが多かった」といい，暴漢から家族を守るために「こちらから望んで部屋を提供した人たちも多かった」という回想もあるようだ[6]。民政局長官クリューコフらは日本人学校やロシア人学校の設立に尽力したが，建物や物資，人員の不足などに見舞われ，校舎の利用は二交代制で，すなわち「最初は日本人の子どもが勉強し，第二部でロシア人の子どもたちが勉強した」[7] という。さらに民政局は，移住してきたロシア人らだけでなく，日本人の労働力をも必要としていた。グリシャチェフは，「ソ連側は日本人の迅速な撤退を好まなかった。十分なソ連移住者が到着するまで，戦後経済には労働力が必要だったのだ」[8] とする。このように，住居において，学校や職場などにおいて，ひいては地域社会において，ソ連からの移住者と日本人ら旧樺太住民は「共住」していたのである。

あらためて，戦後南サハリンの「特異性」とは何だろうか。まず，冒頭でも述べたとおり，樺太戦において敵国どうしであった人々が，戦後すぐに隣人・同居人となり，一つ屋根の下で，もしくは地域社会のなかで共住することとなったということである。さらにそれは，日本領樺太からソ連領サハリン州へという統治体制の移行のなかで，政策的に行われたということである。緊急引揚が停止されたあと，ソ連の統治体制への移行のなかで公式引揚を待つ日本人らと，ソ連への統治体制への移行に伴い，移住を勧められて大陸から渡ってきたロシア人らソ連の人々，さらに朝鮮人や先住民などを含めた旧樺太住民が交わった，特異な空間だったのである。以下では，ゲンナジー・マシュキン『青い海，白い船』（1965）と渡辺毅「ぼくたちの〈日露〉戦争」（1996）という 2 つの小説において，戦後の南サハリンの移行期と共住生活がどのように描かれているかを論じる。それによって，この「特異な空間」がどのように記憶され，現代に対してどのようなことを示唆しうるのかを考察したい。

5　サヴェーリエヴァ『日本領樺太からソ連領サハリン州へ』108 頁。

6　富田武『日ソ戦争 南樺太・千島の攻防 ── 領土問題の起源を考える』みすず書房，2022 年，207 頁。

7　サヴェーリエヴァ『日本領樺太からソ連領サハリン州へ』68 頁。

8　*Гришачев.* Японское губернаторство Карафуто. С. 281.

ゲンナジー・マシュキン『青い海，白い船』

ゲンナジー・マシュキンの小説『青い海，白い船』（1965，邦訳 1968）は，第二次世界大戦の直後にサハリンに渡った少年ゲルカとその家族，ゲルカが出会ったすみことその家族を中心に，戦後の南サハリンの様子を描いた作品である。日本軍との戦闘で祖父や友人の父を殺されたゲルカは日本人を憎んでおり，いつかその復讐をすることを誓っていた。しかしゲルカの心情は，サハリンで出会ったすみこらを通して次第に変化し，最終的には「みんなが，一つ船に，《オレンジエード》号という白い船に，いっしょに乗っている，と感じられるように，していかなければならないのだ」[9] と考えるようになるのである。マシュキン自身も本作を「日本人とロシア人の友情をうたう物語」[10] としており，特にゲルカをはじめとした子どもたちの，敵意から好意へという心情の変化は，共住のなかで生じた好ましいものとして捉えられている。

作者のゲンナジー・ニコラエヴィチ・マシュキン（1936–2005）はハバロフスクに生まれ，10歳のときに家族でサハリンに移住した。2 年間，ネヴェリスク（旧：本斗）で生活し，日本人や朝鮮人の子どもたちと学校に通ったという。その後一家で大陸に渡り，1959 年にイルクーツクの大学を卒業した。彼は学生時代から散文を書いていたが，自身の体験をもとに描いた『青い海，白い船』で脚光を浴びることとなった。イルクーツクでのマシュキンらの文学活動を研究したスヴェルロフは以下のように述べている。

> この作品は，著者の絶え間ない旅と極東で過ごした子ども時代の記憶にもとづいている。主人公の父は，マシュキン自身の父と同様，最前線の兵士であり，斥候だった。主人公の弟ユリクのイメージも，ゲンナジー・ニコラエヴィチの弟ユーリー・マシュキンに原型がある。ユーリー・マシュキンは，ある追悼式典で，この人物に自分自身を重ね合わせている部分が多いことを認めている[11]。

『青い海，白い船』はロシア全土もしくは各地域の学校教育でも長く活用され，日本語訳を含めて数か国語で翻訳も出版されている。その後，本作の続編ともいえる『サハリンからの放浪者』（2004）を発表しており，マシュキンのなかで極東とりわけサハリンは欠かせない要素となって

---

9 ゲンナジー・マシキン（袋一平訳）『青い海・白い船』あかね書房，1968 年，252 頁。なお，本稿において本文中で作者名を示す場合は，よりロシア語の発音に近いかたちで，「マシュキン」と表記する。また，タイトルも原著の表記に合わせて本文中では『青い海，白い船』とする。ただし注や書誌においては翻訳本の表記にしたがう。

10 マシキン『青い海・白い船』257 頁。

11 *Сверлов А.С.* Роль геннадия машкина в «иркутской стенке писателей» // ВЕСТНИК ИрГТУ. 2014. №1 (84). С. 242.

いると考えられる。

この作品には，戦後まもない南サハリンの混乱と，そのなかで共住生活をはじめる人々の様子やその過程が具体的に描かれている。サハリンに上陸したゲルカは日本人を見て，「まったくゆだんはできない。にこにこしているけれど，そのわらいのかげに，なにがかくされているか，しれたもんじゃない」[12] と感じた。一方でゲルカと出会った当初のすみこも，「ロシア人と日本人は，イヌとネコみたいに，けっして仲よくならないものだ」[13] と言う。他の登場人物を見ても，ロシア人は日本人に，日本人はロシア人に敵意や危機感，または不信感を抱いている様子が描かれている。そのようなロシア人と日本人は，戦後の南サハリンの状況下，「一つ家に住む」ことになるのである。

> セミョンはきむらに説明した。いまのところ，日本政府は南サハリンの人たちを，うけいれることができない。だからしばらくは，ロシアの移住者と日本人は同居するしかない。しかも，ソビエトの法律によれば，すまいがなくて困っている人があるのに，四人ぐらいの小家族が，二階家に住むようなことはできない。
>
> 「日本人とロシア人が一つ家に住むなんて，できるわけがありませんよ。」
>
> 書類を読むように，きむらはいった。
>
> 「わたしたちの土地は，一つ家ではないんですか？」
>
> しずかにセミョンはさとした[14]。

小説において，セミョンはゲルカたち移住者の世話役であり，敵対するソ連と日本の人々の仲介者でもある。一方，すみこたちの縁者であるきむらは，冷静で礼儀正しく，ロシア語も理解する人物だが，ロシア人に対して不信感を抱いている様子もある。結局，ゲルカは家族 4 人で，すみこたちが住む家の 2 階に入ることになったのである。

このような状況のなかで，日本人とかかわるようになったゲルカは，紆余曲折を経ながらも，「日本人だって，わるい人ばかりではない」[15] と考えるようになる。一方のすみこも，「……ロシア人はひとりも信用できないからね」というきむらに対して，「でも，ロシア人がみんなわるいとはかぎらないわ」と答えている[16]。ここには，日本人もしくはロシア人を集団的に捉えて敵視するのではなく，直に接した日本人もしくはロシア人を，互いに個として捉える様子が見受けられるのである。共住によって直に接することで，相手を個として捉えるようになるという

---

[12] マシキン『青い海・白い船』61 頁。
[13] マシキン『青い海・白い船』88 頁。
[14] マシキン『青い海・白い船』100-101 頁。
[15] マシキン『青い海・白い船』130 頁。
[16] マシキン『青い海・白い船』135 頁。

変化は，実際にもあったと考えられる。例えば，重延浩はその著書『ボクの故郷は戦場になった』（2023）において，戦後まもない南サハリンでの経験を，以下のように書いている。

> 幼い私はカレオフとの親交によってロシア人は怖い人という印象がきれいに消えていった。怖いのはロシア人ではなく，戦争というものだったのだ。戦争は人間を敵味方に分断する。でも戦争がなければ，ロシア人と日本人は敵味方ではない。その交流が深まれば，とても仲良くなる。子どもの方が良い人か悪い人かを本能的に読み取れたのかもしれない。私はカレオフと，ますます仲良くなっていった[17]。

戦後，父の病院の監督をすることになった青年カレオフと，互いに言葉を教え合うなどの交流を通して，重延はソ連の人々に対する恐れの感情を変化させていった。ゲルカやすみこ，そしておそらくは作者マシュキンやその周囲の人々も，互いに直に接することによって，相手を単にロシア人もしくは日本人として一括りにするのではなく，個人として見たうえでさらに関係を築いていったのではないだろうか。ただし，こうした感情の変化の描かれ方については，留意すべき点もあるため，これについては後述する。

渡辺毅「ぼくたちの〈日露〉戦争」

一方，日本においてもサハリンでの共住生活を描いた小説が発表されている。渡辺毅の作品「ぼくたちの〈日露〉戦争」（初版 1996）では，戦後の南サハリンを舞台に，日本人の子どもたちと移住してきたロシア人の子どもたちを中心とした対立が描かれている。終戦を機に町にはロシア人がやってくるようになり，その数は増え，ついにはロシア人学校もできた。もともとの学校を利用した共用の校舎であったため，棟や共用部の使用時間が異なるとはいえ，日本人とロシア人の子どもたちは否応なく互いが目に入る。当初，密かに罵っているだけであった日本人の子どもたちは，やがてロシア人の子どもたちにけんかをしかけるようになる。はじめのうちは日本人の子どもたちが圧倒的に優勢であったが，体格のよい子どもたちが大陸から移住してきたことで戦意がそがれたり，ロシア人らに対する感情が変化したりするなどして，けんかをすることもなくなっていく。だがあるとき，報復のためか，日本人の子どもたちはロシア人の子どもたちに取り囲まれるのであった。

作者の渡辺毅（1934–2020）は樺太に生まれ，当地で終戦を迎えた後，1948 年に引き揚げるまで，ソ連の統治下で暮らしていた。1989 年にサハリンを再訪し，その後「小さな墓の物語」

---

[17] 重延浩『ボクの故郷は戦場になった―樺太の戦争，そしてウクライナへ』岩波ジュニア新書，2023 年，104 頁。

(1990)，本書「ぼくたちの〈日露〉戦争」，『少年たちの樺太』(1999) など，樺太に関する小説を発表している。マシュキンと同様，渡辺も戦後まもない南サハリンにおける移行期と共住生活を経験している。よってこれらのサハリン・樺太に関する小説は，自らの経験をもとに創作したといえるだろう。『青い海，白い船』同様に，「ぼくたちの〈日露〉戦争」にも，南サハリンでの共住生活やそのなかでの子どもたちの感情が描かれている。

> 終戦後すぐ入ってきたのは軍人と官憲であったが，やがて各産業部門の責任者となるべき民間人とその家族が移住してきた。家族のなかには当然少年や少女がいた。生まれて初めて白人の少年少女を見たとき，日本人の子どもたちは言いようのない強烈なショックを受けた。
>
> 早い時期に移住してきたロシア人は，多分戦後処理のために政府機関から派遣されたエリート階層であったのだろう，純粋な白人が多く，身なりも上等で日本人を見下すような態度であった[18]。

子どもたちはこういったロシア人たちを見て，そして特にロシア人の子どもたちを称賛する日本人の大人たちの言い分を聞いて，「煮えたぎるような嫉妬心とともにみじめな失墜感があったはずだ」[19]。

しかし，終戦の翌年，本土からの移住者がいっそう増えたことで，南サハリンに暮らす日本人の子どもたちの状況は変化した。それに伴い，「ぼくらの関心と情熱は新しい環境に適応するための具体的方向に向けられはじめていた。ロシア語をおぼえるとか，ロシア人の友達をつくるとか，そんなことを競いあう風潮がぼくらのなかに広まりはじめていた」[20] のである。また，

> 大人たちの世界でもロシア人に対する変化はあった。最初はあんなにも恐れ，卑屈になっていたのに，本土から来たロシア人が住むところがなくて日本人の家の物置に住み着き，路傍に糞をし，日本人の家にパンを買いにくるようになって，大人たちは，
>
> 「どっちが戦争に勝ったのか負けたのかわからんな」などと言っていた。〈……〉
>
> いずれにしても日本人は，はじめのうちのロシア人に対する畏怖感からは少しずつ抜け出していた[21]。

---

[18] 渡辺毅「ぼくたちの〈日露〉戦争」(中島敦他『コレクション 戦争と文学 17 帝国日本と朝鮮・樺太』所収) 集英社，2012 年，594-595 頁。

[19] 渡辺「ぼくたちの〈日露〉戦争」596 頁。

[20] 渡辺「ぼくたちの〈日露〉戦争」607 頁。

[21] 渡辺「ぼくたちの〈日露〉戦争」607 頁。

としており，ここには大人たちの感情の変化も描かれている。ただし，子どもたちと大人たちでは若干異なるようだ。子どもたちは「自分たちより上質なものにたいして寛容になれない「嫉妬心」」[22] からロシア人の子どもたちに対して敵意を抱いていたが，彼らも結局は自分たちと同じようなものであると，すなわち対等であると気づいてからは，彼らの心は新しい環境に適応する方向へと向かう。一方，ここで描かれる大人たちの感情は，旧樺太社会に入り込んできたロシア人に対する畏怖から，彼らの行動を見下すといったような軽蔑への変化だと読み取ることができるのではないか。この点にいたっては，子どもたちのほうが柔軟に対応し，一歩すすんでいたような描き方がなされている。

「ぼくたちの〈日露〉戦争」で描かれる「共住」の舞台は，主に学校や地域であり，一軒の家とそこに入った家族を中心に描かれている『青い海，白い船』よりもやや広い。ひとえに共住といっても，「一つ屋根の下」といったごく限られた空間から，学校や地域，まち，というようにさまざまな範囲が想定され，さらにそれらが重なり合っている。また，それによって戦後南サハリンという空間全体においても，人々は共住状態であったということができる。戦後，日本領樺太がソ連領南サハリン州になっていく移行期において，ロシア人と日本人が，さらには朝鮮人や先住民らを含めたさまざまな人々が共住生活を営み，互いに直に接することによって，彼らの感情は変化していく。もちろんそれは単純に敵対から友好へと変化するわけではない。それでも小説において子どもたちは，突然訪れた共住生活やその相手と，彼らなりに折り合いをつけようとする。これについては２作品を比較しつつ，以下であらためて論じよう。

「遊戯めいた衝突」

ここまで，それぞれの作品について，戦後の南サハリンやそこでの共住生活がどのように描かれているかを概説してきた。２つの作品に登場する子どもたちに，共住生活を通して敵意や不信感以外の感情を互いに抱くようになるといった変化が見られることは，これまで論じたとおりである。一方で子どもたちは，突然，そして政策によってほとんど強制的に始まった共住生活に対して，単に受け身であるわけではない。むしろ積極的に，相手への敵意や不信感，先の戦争や突然の共住生活で生じたわだかまりに向き合っている。その方法のひとつが，「疑似戦争」である。これら２つの作品には，共通して子どもたちが対決する場面がある。「ぼくたちの〈日露〉戦争」の解説において，川村湊は子どもたちの攻防を「些細で，遊戯めいた衝突」[23] としている。ここでは，２つの作品に共通して見られる「遊戯めいた衝突」から，戦後の南サ

[22] 渡辺「ぼくたちの〈日露〉戦争」608 頁。

[23] 川村湊「解説」（中島敦他『コレクション 戦争と文学 17 帝国日本と朝鮮・樺太』所収）集英社，2012 年，672 頁。

ハリンとそこでの共住生活を捉え直し，子どもたちの視点で描くことの意義を考えてみよう。

『青い海，白い船』では，すみこの兄であるいわおとゲルカが，相撲で対決する場面がある。神社祭の日には相撲大会も開かれており，いわおはきむらに，ゲルカは父に言い立てられて相撲をとることとなる。

> ……いわおはぼくのベルトをつかんで，横にねじふせようとした。ぼくはがんばった。だが，両足をひろげて，立ちなおるまえに，いわおはまた攻撃した。ぼくはうっかり目をそらしていた。このとりくみをすみこがどう見ているか，それをさぐろうとした。すみこはえを持って，かさをまわしていた。
>
> このすきに，いわおはぼくの胸をついた。というのは，きむらが大ぜいのなかから，《つけ，つけ》と，どなったからだろう。
>
> ぼくはどさっとあおむけにたおれた。だが肩をかばって，右手をついた。手首のうえのほうでなにか音がした。でも，おかげで敗北をまぬかれた。行司がかけよった。ぼくはもう立ちあがって，いわおをしめつけていた。いわおは力をふりしぼって，したたかぼくの胸に頭突きをくれ，ぼくの腕からすりぬけようとした。ぼくの右手はきゅうにしびれた。しかしいわおのベルトをかたくつかみなおして，ひとふりで砂にたたきつけた。右手のしびれはなくなったが，かわりにひどい痛みがおそった[24]。

その後，大人たちの野次を背にゲルカは逃げたが，結局は双方に賞金が渡された。「いわおがぼくの胸をついたのは，フェアじゃないよ」[25] というゲルカに対し，すみこは「きむらが，柔道のやりかたを，兄におしえた」[26] からだと弁明した。胸を突き飛ばされたことがきっかけでゲルカは手首を怪我しており，すみこの父げんが彼に治療を施した。

一方，「ぼくたちの〈日露〉戦争」では先に紹介したとおり，少年たちの攻防が物語の中心となっている。最初のうち，日本人の少年たちは移住してきたロシア人の子どもたちに嫉妬心を抱き，幅を利かせる彼らに対して陰口を言っていた。一方でロシア人の子どもたちも，日本人の子どもたちを挑発するような言動を見せていた。だが，ロシア人の少年たちに対する日本人少女タカネのふるまいがきっかけで敵愾心を煽られたり，ロシア人の少年たちがそれほど強くないと知れ渡ったりしたことがきっかけで，日本人の少年たちによる「ロスケ狩り」が始まる。ただし，普段のけんかのルールをもとに，「相手は自分たちと同じくらいの男子に限ること，突き飛ばすくらいはかまわないが，こぶしで殴ることはしないこと，つねに自分の逃げ道を頭の

---

[24] マシキン『青い海・白い船』113-114 頁。
[25] マシキン『青い海・白い船』120 頁。
[26] マシキン『青い海・白い船』121 頁。

中に入れておくこと，絶対に傷つけるようなことはしないこと，相手が泣き出したらそれで終わりにすること」[27] などのルールを設定したうえで，けんかをしかけたのである。この「戦争」は，当初日本人側が優位であり，幅を利かせていたロシア人の子どもたちは，学校でも日本人の子どもたちを恐れ，校内の共用部を独占することもやめた。しかしそれは年内までで，翌1946年の春より本格的に大陸から人々が移住してくると，体格の良い移住者の子どもたちを見た日本人の少年たちは戦意を喪失し，むしろ報復を恐れるようになった。もちろん，先に述べたとおり，移住者の増加で南サハリンの環境が変化し，それに子どもたちが彼らなりに適応しようとしたことも，「戦争」に消極的になった要因である。

結局，少年たちの中心にいたノボルが勝ち負けのない「終戦」を宣言し，日本人側からしかけることをやめた。だが，今度はロシア人の子どもたちが新たな移住者を含めて仲間を増やし，日本人の子どもたちを侮辱したり，彼らの所持品を巻き上げたりするようになった。しまいにはノボルと移住者ゴロニンの，一対一の勝負となった。ノボルが得意の柔道の技をかけるまえに，ゴロニンは相手の顔を殴った。その後もゴロニンはノボルを殴ったり蹴ったりし，この勝負はゴロニン，すなわちロシア人側の圧勝となる。だが，ゴロニンはそれ以降日本人の子どもたちと争うようなことはなく，日本人に意地悪をするロシア人らを叱るほどであった。ぼくの考えによれば，「ノボルがけじめをつけるために殴り倒されたのと同じように，彼もけじめをつけるために殴り倒しただけなのかもしれない」[28]。ゴロニンは冬，犬を助けようとして川面の氷から落下し，ノボルの助けの甲斐もなく死んだ。「バカだよな，あいつ……。この水に飛び込むなんて，バカだよな……」[29] とくりかえしたノボルの横顔は，怒っているような，大人びたものだった。

これらの「遊戯めいた衝突」は，子どもたちにしてみれば，「国際試合」[30] であり「三回めの日露戦争」[31] である。子どもたちは子どもたちなりに，ルールに則って対決しようとする。だからこそ，ルール違反と思われる行為には理不尽さを覚えるのである。『青い海，白い船』では，胸をついたいわおに対してゲルカは「フェアじゃない」と主張する。「ぼくたちの〈日露〉戦争」では，ある日本人の少年が襲われ，助けに入ったノボルが剃刀で切られかけるという場面がある。仲間の一人であるヒロシによれば，対抗するには刃物を使うしかないが，「そんなことしたらチョルマに入れられて，家の者も日本に引き揚げることできなくなる」[32] のだ。だからこそロシア側の少年たちのやり方について，日本人の少年たちは子どものけんかのルールを無視し

[27] 渡辺「ぼくたちの〈日露〉戦争」603頁。
[28] 渡辺「ぼくたちの〈日露〉戦争」618頁。
[29] 渡辺「ぼくたちの〈日露〉戦争」621頁。
[30] マシキン『青い海・白い船』118頁。
[31] 渡辺「ぼくたちの〈日露〉戦争」604頁。
[32] 渡辺「ぼくたちの〈日露〉戦争」610頁。

た，汚いやり方だと感じるのである。また，ゴロニンがノボルの顔を殴ったときも，「それは日本人の子どものけんかにはないやりかただった。殴りあいで拳を使う場合には，顔を狙うことは汚いやり方とされていたからだ」[33] とした。同時に，子どもたちの間の「疑似戦争」は，必要以上に長引かないのである。なぜなら，彼らは彼らなりに借りを返したり，納得したりして落としどころを見つけており，さらに両者がそのことを理解しているからだ。ゲルカに不正を責められたいわおはうなだれ，いわおの行動はきむらの指示や指導の結果であったと知ったゲルカも，それ以上いわおを追及しない。また，ノボルは自らの行為のけじめをつけるように攻撃を受け止め，攻撃したゴロニンもそれ以降は何もしない。だからこそ子どもたちはその後も交流を深め，やがて訪れる別れの際には悲しみや怒りを感じたのかもしれない。

一方で，大人たちが介入したり，ましてや子どもたちと同じように対決したりしようとすると，絶妙に保たれていたバランスが崩れてしまうようだ。そして子どもたちはそのことをよく知っている。「ぼくたちの〈日露〉戦争」では，子どもたちが「大人さえ出てこなけりゃ，負けるはずないんだ」[34] と言っており，ノボルがゴロニンに倒されたときも，

> ヒロシとぼくは泣きたい気持ちをこらえて左右からノボルを抱えあげた。何事かと，日本人の大人やロシア人の大人が寄ってきたが，二人は彼らの問いかけに答えなかった。これは子ども同士の問題である[35]。

としている。『青い海，白い船』の相撲の場面でも，ゲルカの父やルイビンはゲルカを，きむらはいわおをそれぞれ嗾け，一方でセミョンはとめようとするが，当のゲルカといわおはすみこの力も借りながら，彼らの間で「遊戯めいた衝突」を終わらせることができている。「こどものやることだ。すきにさせたらいいじゃないか」[36] というルイビンは，子どもたちを煽りながらも彼らの「戦争」を理解しているようだが，当の本人はその後，ゲルカの父を連れてきむらとけんかをする。相撲を取った子どもたちの真似のように行われたけんかはきむらの勝利であったが，その後も互いに敵意や不信感を募らせ，ついにはルイビン家の火事騒動の犯人をめぐり，また諍い合うのであった。日本人の大人とロシア人の大人たちは，落としどころをうまく見つけられないのである。もちろん，ゲルカも火事騒動で再び日本人らを疑い憎みかけるが，再びすみこやいわおと会い，ともに海を泳ぐのであった。これは，火付けではなく不始末からの火事であったとゲルカが知ったのはもちろん，すみこやいわおも含めて，子どもたちが互いの状

---

[33] 渡辺「ぼくたちの〈日露〉戦争」613 頁。
[34] 渡辺「ぼくたちの〈日露〉戦争」603 頁。
[35] 渡辺「ぼくたちの〈日露〉戦争」614 頁。
[36] マシキン『青い海・白い船』116 頁。

況や心情を理解しようとし，必要以上に「戦争」を長引かせないスタンスにあるがゆえに実現できる場面ではないだろうか。そして作品において，相互理解ができる人々という役割を子どもたちに負わせているともいえるだろう。

共住を描くということ

これまで論じてきたように，戦後の南サハリンにおける日本人とソ連の人々，朝鮮人や先住民らを含めた共住生活は特異なものであった。一方は引揚停止によって南サハリンにとどめられ，一方は移住を斡旋されて南サハリンに渡ってきた人々は，樺太戦において「敵」であったにもかかわらず，同じ空間で暮らすことになったのである。彼らは一つ屋根の下に住んでいたという意味で共住していたともいえるが，地区や地域，そして南サハリンという一定の社会空間において共住していたと考えることもできるだろう。『青い海，白い船』と「ぼくたちの〈日露〉戦争」は，サハリンにおける短くも特異な時期を描き出した貴重な作品であるといえよう。一方で，この特異な共住生活期やそれを記録または記憶した作品を検討する場合，留意しなければならない点もいくつかある。加えて本稿で分析した２作品は小説であり，必ずしも作者の体験にもとづかない部分，もしくは作者の体験をもとに加工された部分があることを想定すれば，より一層注意深く読み解く必要があるだろう。以下では，とりわけソ連対日本という二項対立に起因する問題点を指摘し，２つの作品について，さらには共住を描き出すことについての論を深めたい。

まず，「共住」のステレオタイプについてである。どちらの物語においても，ソ連の人々と日本人は当初，互いに敵意や不信感を抱いている。だが共住を通して，直に個としての互いに接することによって，その感情を変化させることとなる。戦後まもない南サハリンにおいて，ある同じ空間で生活することによって，否応なしにも交流が生まれ，そのなかで敵対心以外の感情も生まれていることが描かれている。これはともすれば単純化され，異なる国や文化の人々であっても相互理解ができるという美談に仕立てられる可能性もあるということである。しかしながらそれぞれの作品を注意深く読めば，そこには共住の困難さや複雑さも滲んでいるのである。また，ステレオタイプがあることに関しては，登場人物についても同様といえるだろう。ここで特に注目したいのが，相手側の女性に対する，「美しく魅力的な女性」というステレオタイプだ。『青い海，白い船』において，ゲルカはすみこに魅力を感じ，主にすみこへの思いを通して日本人に対する敵対感情を変化させていく。一方，「ぼくたちの〈日露〉戦争」においても，日本人の少年たちはソ連からやってきた子どもたち，とりわけ女の子を見ようとする場面がある。また，「日本人の子どもの中ではきわだって洗練された容姿のタカネは，ロシア人の少年たちの目をもひいたらしい」[37] というように，日本人の少年の視点を通して，ロシア人の少年たちが日本人の少女に向けるまなざしを描き出した一文もある。どちらの作品においても，少年た

ちは相手に敵対心をもつ一方で，美しく魅力的な相手側の少女に惹かれるといった構図が見られる。こういった構図は，特に小説などのフィクション作品において強調されやすいのではないだろうか。

以上のようなステレオタイプは，ソ連対日本という二項対立のもとに生じていると考えられる。たしかにソ連と日本は樺太を含む極東において戦争をし，敵国どうしであった。そこから突然共住することになったのだから，作品においてもソ連対日本という構図が基盤にあること自体は否定のしようがない。一方で，共住生活において対立している，もしくは作品において対立軸に置かれているのはソ連の人々と日本人だけではない。作品を読むにあたって，他の対立軸も見逃してはならないだろう。2 つの作品はどちらも子どもたちの視点で書かれており，ソ連からやってきた子どもたちと日本の子どもたちが互いに敵対心を抱き，ときに衝突したり助け合ったりしている。その意味ではソ連対日本という二軸が基盤となっているが，たとえ同じ国どうしであっても，人々はときに対立する。例えば『青い海，白い船』では，ゲルカの両親はサハリンでの生活をめぐって頻繁にけんかをしているし，「ぼくたちの〈日露〉戦争」では，ロシア人を称賛したり彼らの気を引こうとしたりする日本人の女子生徒や女性教師に対して，日本人の少年たちが不満を抱いている。このように，ソ連と日本だけではなく，大人どうし，大人と子ども，男性と女性など，作品中にはさまざまな対立軸が存在し，それらが複雑に絡み合っているのである。

また，ソ連と日本以外の人々の描かれ方についても検討する必要がある。「ぼくたちの〈日露〉戦争」の解説にて川村は，ロシアの子どもたちのなかに登場するゴロニンについて，「日本人でも白人でもないゴロニンは，冬木憑の「和人（シーシャ）」に登場するオロッコやオロチョン，ギリヤークなどの少数民族かもしれない」とし，「「和人」は，〈……〉ともすれば，日本とロシアの間に“見えなくさせられている”少数民族に焦点を当てた希少な作品の例である」と述べている[38]。ゴロニンは作中において「皮膚の色もあさぐろく，髪も目も黒かったが東洋人の顔つきではなかった」[39] と書かれており，それ以上のことは明らかではないが，「見えなくさせられている」人物である可能性が指摘されていることは重要である。『青い海，白い船』ではロシア人と日本人以外の人物はほとんど登場しないが，サムライがアイヌを圧倒している絵がすみこらの家に飾ってあったり，朝鮮人のキムが海で死んだセミョンを弔いに来たりする。「見えなくさせられている」ことも大きな問題点であるが，同時に「描き出す」こと自体も問題をはらむ。作者が自身のことばで，もしくは登場人物を通して，相手を書き換えてしまうことと紙一重だからだ。ここにも共住を描き出すことの困難さや複雑さが潜んでいるのである。

---

[37] 渡辺「ぼくたちの〈日露〉戦争」602 頁。

[38] 川村「解説」672 頁。

[39] 渡辺「ぼくたちの〈日露〉戦争」611 頁。

おわりに：今，「共住」を考える意味

本稿では，ゲンナジー・マシュキン『青い海，白い船』と渡辺毅「ぼくたちの〈日露〉戦争」を比較しながら，戦後の南サハリンにおける共住生活とその描かれ方について論じてきた。日本人とロシア人の子どもたちは，戦後の南サハリンで強いられた共住生活のなかで，「遊戯めいた衝突」を含めて直にかかわることによって，互いへの敵意や不信感以外の感情を抱くことになる。子どもたちは彼らの方法で「戦争」に折り合いをつけ，日本領樺太からソ連領サハリン州へと移行する変化の激しい社会のなかで，さらに関係を築いていく。問題やわだかまりを抱えながらも同じ空間で共住していく様子が描かれているこれらの作品からは，たとえかつて敵どうしであったとしても，同じ空間での共住が可能であるということ，平和や友好の実現が可能であるということが読み取れる一方で，敵味方問わず他者との共住の難しさや複雑さをも読み取ることができる。また，戦後の南サハリンにおける共住生活を描いたり語ったりする際には，ソ連対日本という二項対立に陥りがちで，その結果，共住のあり方やそこに登場すべき人物のステレオタイプを押しつけたり，朝鮮人や先住民らの存在を不可視化したりする可能性も常に持ち合わせている。

この共住生活の発端ともなった樺太戦から，80 年が経とうとしている。戦後の南サハリンにおける共住生活は世界史上，ごく限られた地域の，ごく限られた期間の出来事である。しかしながらこの特異な現象を描き出したり，そうした描写や作品などを享受したりすることは，戦後 80 年が経とうとしている今，あらためて意味を持とうとしているのではないだろうか。演劇「フレップの咲く花，咲く頃に」（札幌座）は，戦後のサハリンで幼少期を過ごした引揚者の手記をもとにつくられたが[40]，その記録映像をもとに，北海道稚内市の育英館大学にて，「わが家にソ連人がやってきた」(2022) というドキュメンタリー映像作品が制作された。映像作品の制作にかかわった牧野竜二は，この共住生活期について，「日本統治からソ連統治に移るナショナルな変化と，異なる人種間の心が通じ合うローカルな変化という相反する 2 つの変化が起きていたことが特徴である」[41] とし，この時期を描くことによって「2 つの変化を対比し，視聴者にナショナリズムへと進みつつある現在の国際社会を見つめ直すきっかけを与えること」[42] をめざした。この映像作品には，樺太や戦後まもない南サハリンでの居住経験のある人々や，実際に演劇に出演した人々が，当時に思いを馳せる様子はもちろん，SNS での外国人への差別的発言，ウクライナ侵攻など，現代社会で起こっている事象も組み込まれている。

---

40 公益財団法人北海道演劇財団 HP「札幌座 フレップの花，咲く丘に」[http://www.h-paf.ne.jp/program/200815frep_ses/]（2024/08/29 最終閲覧）。

41 牧野竜二「樺太の記憶継承プロジェクトが及ぼした大学生の態度変容に関する考察」『中央大学政策文化総合研究所年報』26 号，2022 年，229 頁。

42 牧野「樺太の記憶継承プロジェクトが及ぼした大学生の態度変容に関する考察」229 頁。

本稿で分析した 2 作品からも読み取ることができるように，たとえ同じ国や地域の人々であっても，ときに家族であっても，「共住」することが難しかったり，対立したりすることもあるだろう。ましてや戦後の南サハリンのように，異なる国や地域の人々が共住するのは非常に困難を伴う。しかしながら，戦後の南サハリンがそうであったように，異なる国や地域の人々と共住しなければならないときもある。特に現代社会では，インターネットや SNS などを通じて世界中の人々が結びつき，広義では「共住」状態にあるといえるのかもしれない。そのような共住社会を生きていく我々にとって，政策によって半ば強制的に，かつ終戦から短期間で，「敵」どうしが共住することとなり，一筋縄ではいかないながらも，それぞれが関係性を築いていったかつての南サハリンの記憶は，今一度思い起こすべきものなのではないだろうか。

（おおたに　りの・欧米文学研究室）

書誌

※本文中にて直接引用のないものも含む。

一次文献

ゲンナジー・マシキン（袋一平訳）『青い海，白い船』あかね書房，1968 年。

渡辺毅「ぼくたちの〈日露〉戦争」（中島敦他『コレクション　戦争と文学 17　帝国日本と朝鮮・樺太』所収）集英社，2012 年，592–622 頁。

二次文献

Гришачев С.В. Японское губернаторство Карафуто (1905-1945): история и социальная память // Ежегодник Япония. 2019. Т. 48. С. 272-286.

Иконникова Е.А. и др. Литература Сахалина и Курильских островов. Южно-Сахалинск Издательство СахГУ. 2014.

Сверлов А.С. Роль геннадия машкина в «иркутской стенке писателей» // Вестник ИрГТУ. 2014. №1 (84). С.241-243.

エレーナ・サヴェーリエヴァ（小山内道子訳）『日本領樺太からソ連領サハリン州へ　一九四五年――九四七年』成文社，2015 年。

重延浩『ボクの故郷は戦場になった ── 樺太の戦争，そしてウクライナへ』岩波ジュニア新書，2023 年。

富田武『日ソ戦争　南樺太・千島の攻防 ── 領土問題の起源を考える』みすず書房，2022 年。

牧野竜二「樺太の記憶継承プロジェクトが及ぼした大学生の態度変容に関する考察」『中央大学政策文化総合研究所年報』26 号，2022 年，211–236 頁。

公益財団法人北海道演劇財団 HP「札幌座 フレップの花，咲く丘に」
［http://www.h-paf.ne.jp/program/200815frep_ses/］（2024/08/29 最終閲覧）。